

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

17世紀と18世紀の日本におけるドイツからの知識移 転

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 神戸市外国語大学研究会 公開日: 2009-09-30 キーワード: 作成者: Franz, Edgar メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/471

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



17世紀と18世紀の日本における ドイツからの知識移転

Edgar Franz

17世紀と18世紀の日本においてドイツ人医学者によって持ち込まれた西欧の知識の重要性は一般的に過小評価されていると言える。

この論文では日本に関係したドイツ人医学者の中でも、17世紀と18世紀の日本に最も重要な影響を与えたカスパー・シャムベルゲル、エンゲルベルト・ケンペルとヨーハン・アダム・クルムスという3人について簡単に紹介すると共に、それぞれの医学者が果たした役割について日本と西洋の両方の研究成果を基に再検討する。

日本は明治維新以降、驚くべき速さで西洋の知識や技術を取り入れたが、そのような知識の吸収を可能にした基礎を築くにあたり、ドイツ人医学者の17世紀と18世紀の日本での活動はどのような影響を与えたのであろうか。

また日本という島国が近代化へ向かうにあたり、日本の文化の歴史の中で医学はどのような重要性を持っていたのだろうか。そして医学は日本と近代的知識を結ぶ架け橋であったのだろうか。ヨーロッパやアメリカではあまり注目されてこなかったこのテーマについて、日本ではここ数十年の間に数多くの研究がなされてきた。

2009年、宮崎克則が編集した「ケンペルやシーボルトたちが見た九州，そしてニッポン」という興味深い著書が出版された (Miyazaki 2009)。

日本医師学雑誌にこれまで発表されてきた論文で用いられた文献資料はヨーロッパやアメリカの研究ではあまり扱われてこなかった。

一方で、何人かのドイツ人の研究者達がこれまで知られていなかった文献資料から新しい発見を得、論文を発表してきたが、それらの研究結果はこれまで日本語に翻訳されてこなかった。ドイツのケンベル研究者であるベアトリス・ボダルト・ベイリーは2009年に新しい作品を日本語で発表した (Bodart-Bailey 2009)。

筆者は日本の大学で教鞭をとる150人の日本人医学者を対象にアンケート調査を行い、17世紀と18世紀の日本において、最も重要な役割を果たしたと思われるドイツ人医師を尋ねたところ、上で述べたカスパル・シャムベルゲル、エンゲルベルト・ケンベルとヨーハン・アダム・クルムスの3人のドイツ人医学者達が特に重要であるという回答が得られた (Franz 2005 : 31 - 56頁)。

カスパル・シャムベルゲル (1623 - 1706)

1641年、オランダ商館は將軍の命により人工の島、出島に移転した。1635年・36年、長崎の港を、港の近くにある丘から削り取った土で埋め立てて、出島は造られた。歴史家である沼田次郎は出島を1万3千100平方メートルの小さな人工島として出島を説明した。出島へのたった一つの通路はいつも監視されており、朝に開かれ、夜には閉鎖された。ヨーロッパ人は特別な許可を得た者だけが、出島を出ることができた (Numata 1966 : 171頁)。ここにはオランダとの貿易関係があるヨーロッパの医学者達のみが住むことを許された。出島のオランダ商館に勤める一番重要な医師達はドイツ人であった。彼らはオランダ政府のために勤務し、オランダ人として見られていた。日本の専門家であるグラント・K・グットマンはこの小さな島での制限された生活事情を分かりやすく説明している (Goodman 1986 : 18 - 24頁)。

1649年、ドイツ人のカスパル・シャムベルゲルは外科医として出島にやってきた。彼はとても有能だとされ、1649年から1651年までしか出島に住んで

いなかったにもかかわらず、日本に来た初期のヨーロッパ人医師達の中でも特に重要な役割を果たした (Mestler 1957 : 1005頁)。

1990年から1996年にかけて、ドイツ人の研究者であるヴォルフガング・ミヒェルは新しい資料に基づいて日本医師学雑誌に発表した三つの論文の中でカスパル・シャムベルゲルについて詳細に述べている (Michel 1990, 1995, 1996 a/b)。

ミヒェルの *Von Leipzig nach Japan* (ライプツィヒから日本へ) という重要な著作によって彼の研究結果はヨーロッパでも知られるようになった。2008年、九州大学の学術雑誌に発表された論文で、ミヒェルはさらに日本でのカスパル・シャムベルゲルの活動と「カスパル流外科」について紹介している。ミヒェルはシャムベルゲルについてこれまで知られていなかった多くの事実を明らかにした。特にミヒェルは多くの新しい資料を基にシャムベルゲルの生没記録 (Michel 1999) を含めた詳細な分析を行った。資料となったのは当時江戸にいたビジュレヴェルトというオランダ人商人と長崎のオランダ商館長ブロークホルストの間の往復書簡や、当時オランダ外科について極秘に記された日本語の書類 (Michel 1995 : 6頁) というものであった。

1623年から1706年まで生きたシャムベルゲルはライプツィヒで外科医師試験を受け、26歳の時、商館医として長崎の出島へ渡った。医学に興味を持った数多くの日本人は医術を学ぶため、出島にシャムベルゲルを訪ねた。1649年に初めて外国人医師として江戸参府に同行したシャムベルゲルから幕府は強い印象を受け、彼に江戸滞在を延長し、西洋医学の講義を行う様依頼した。シャムベルゲルは数か月を江戸で過ごした後、1650年に將軍からの高価な褒美の品と共に出島に戻った。

江戸参府の際にシャムベルゲルは多くの患者や医学生に出会った。シャムベルゲルの最も重要な成果は「カスパル流外科」を創始したことである (Otori 1971 : 22頁)。カスパル流外科はオランダの外科医術の中で最も大

きな影響を与える学派となった (Sugimoto 1978 : 286頁)。

シャムベルゲルの弟子の中で最も有名なのが1641年に通訳として出島にやってきた外科医の猪俣伝兵衛である。シャムベルゲルの外科医学の流れを汲んだ猪俣の医学は彼の弟子である伊良子道牛 (1671-1734) や河口良庵 (1670 - 1746) に伝えられた。ミヒエルは彼の著作 *Von Leipzig nach Japan* (ライプツィヒから日本へ) の中で一章を河口について割いている。またミヒエルが示すように、河口の残した文献からは、河口が、シャムベルゲルの去った後も西洋外科医学についての知識を集めようとしていたことがうかがえる (Michel 1999 : 170頁)。今日でも通訳者猪俣によるシャムベルゲルの医術についてレポートなど、カスパル流外科を参照した手書きの医学資料が残されている (Michel 1999 : 153頁)。

シャムベルゲルが果たした役割への理解については、近年の研究の中で大きな進展がみられた。1957年のゴールドン・E・メストラーのシャムベルゲルについての描写は他者の文献資料に基づいたものであったが (Mestler 1957), これをヴォルフガング・ミヒエルの新しい研究結果と比較すると、当時のシャムベルゲルについての様々な見解が今ではふさわしくないと判断できる (Michel 1990, 1995, 1996 a/b, 1999)。

ミヒエルの研究からも、シャムベルゲルが現在の日本では、カスパル流外科の創始者として非常に重要な存在として見られていることがわかる。シャムベルゲルは西洋医学、本草学と薬品の生産の取り組みの持続のため大きな役割を果たしており、19世紀に始まった急速な日本の現代化の基礎に貢献した (Michel 1999)。

エンゲルベルト・ケンペル Engelbert Kaempfer (1651 - 1716)

エンゲルベルト・ケンペルは1651年にレムゴで牧師ヨハネス・ケンペルの息子として生まれた。クラコフ大学の哲学博士号を取得後、ケンペルはケー

ニヒスベルク大学で医学を勉強し、1694年にライデンで医学の博士号を取得した。彼のラテン語で書かれた *Disputatio Medica Inauguralis Exhibens Decadem Observationem Exoticarum* には、日本に関する二つの研究も含まれていた。1681年にケンペルはスウェーデンのウプサラに赴き、そこでスウェーデン王のカール11世に宮内官として仕えた (Bowers 1970 : 53頁)。1681年、ケンペルはスウェーデン宮殿の要請で書記官としてベルシャへの遠征に加わり、ベルシャ王のもとへ派遣された。この際にケンペルはベルシャの植物学と自然史を学ぶことができた。その後1685年にケンペルは医師として東インド会社に勤め、1690年に出島に派遣された (Michel 2001)。

ケンペルが来日した時には彼がドイツを離れてすでに10年が経っていたが、それまでに彼は多くのアジア諸国の宗教、歴史、言語、医学、地理学、動物学と植物学に関する知識を身に付けていた。ケンペルは一般的なヨーロッパ人が持つ自民族中心主義の狭い見解で日本を見るのではなく、より広い視野で物事を見ようとした。彼はそれまでの幅広い経験に基づき、日本で見聞したことを世界中の多くの文化と比較することができたため、日本をより深く理解することができた (Bodart - Bailey 1988 : 5頁)。

ケンペルの出島での勤務は僅か2年であったが、その間、1691年と1692年にケンペルは江戸参府に参加した。クライヴェーク・デ・スヴァーンはケンペルの江戸参府について詳しく記している (Kleiweg de Zwaan 1917 : 472 - 480頁)。

出島でケンペルは商館医として医学の他に天文学と数学を教えた。ケンペルは一人の若い日本人の従者を与えられ、彼に医学を教え、彼からは日本についての多くの情報を得たが、ケンペルはおそらく彼の従者を保護するために彼のアイデンティティーを公開しないように守った。ケンペルが従者から得た情報は彼の江戸参府の参加により更に広く深い知識となった。

パウル・ファン・デア・フェルデ (Paul van der Velde) は新しく発見した資料に基づいてケンペルの従者の名前は今村源右衛門英生 (1671 - 1731)

であったと推論した。ファン・デア・フェルデは今村が少年時代に出島で外科を学んだことは証明したが、今村がケンペルの従者であったという証拠には不十分であった。しかし、その後、ロンドンの英国国立図書館の日本に関するコレクションの長年の担当者であるユー・イング・ブラウン (Yu - Ying Brown) が新たな証拠資料を発見し、今村がケンペルの従者であったということが明らかになった (Brown 1990 : 102 - 113頁)。

片桐一男はこの証拠とされる資料を翻訳し、彼の1995年の今村源右衛門英生についての作品の中で公表した (Katagiri 1995 : 21 - 23頁)。片桐は彼の1997年の論文の中で、新しく発見した資料に基づき、ケンペルと今村という二人の学者の実りの多い共同作業について詳細に記している。ケンペルと今村によって行われた、西洋の学術作品の翻訳は、日本への知識移転に非常に大きく貢献した (Katagiri 1997 : 57 - 74頁)。ファン・デア・フェルデは今村がケンペルと同じような学術的能力を持っていたと指摘している (Van der Velde 1993 : 174 - 193頁)。

ケンペルは多くの文献で「日本の学術的発見者」として褒めたたえられている (Meissner 1961 : 6 - 7頁)。カール・マイアー・レムゴは彼の1937年に発表されたケンペルについての伝記のタイトルでケンペルのことを「初のドイツの研究旅行者」と呼んでいる (Meier - Lemgo 1937)。このマイアー・レムゴによる伝記は長年にわたり基準的学術書として見られていたが、新しい研究に基づくデットレフ・ハーバーラントによるケンペルの伝記 *Das ungewöhnliche Leben des Engelbert Kaempfer* (エンゲルベルト・ケンペルの不思議な生涯) (Haberland 1990a) と、そこからさらに内容が拡張された英語版の出版のため (Haberland 1996)、マイアー・レムゴの伝記は古いものと見なされるようになった。ハーバーラントは、ケンペルの研究と彼が日本にもたらしたことは日独関係において奇跡的で幸運なケースであると同時に、歴史における日独関係のクライマックスであったと述べている。ケンペルが伝えた日本に関しての当時のイメージはかけがえのないものであ

た。ハーバーラントはケンペルの「日本の歴史と紀行」という作品を「昔の日本についての旅行文献の最高著作」と見なしている (Haberland 1990a : 9頁)。

驚いたことに長年ドイツではケンペルの主な著作を出版する出版社がなかった。

ケンペルの *Geschichte und Beschreibung von Japan* (日本の歴史と紀行) という作品、は初めてスイス人のヨーハン・カスパル・ショイヒツァー (Johann Caspar Scheuchzer) の英語訳で1727年にロンドンでThe History of Japanというタイトルで発表された (Kaempfer 1927)。2001年から2003年までにかけて、解説付きの作品はイウディツィウム出版社よりすこしずつ刊行されている (Haberland, Michel, Gössmann : 2001 - 2003)。

特にヴォルフガング・ミヒェルとバレント・J・テルヴィールにより発表されたHeutiges Japan (今日の日本) という本の第1と第2巻では、今までのケンペル研究に関する問題点がもう一度議論され、部分的に答えられ、同時に新たな問題点が発見された (Michel, Terwiel 2001)。

それまでに発表されていた全ての版は著しくケンペルのオリジナル原稿と違っていたことが明らかになり、新しい版の出版が喫緊の課題となった。

ドーム (Dohm) によるケンペルの版 (Kaempfer 1964) に関してミヒェルは、ザビーネ・クロック・ダッフア (Sabine Klocke - Daffa), ユルゲン・シェッ플ラー (Jürgen Scheffler) とギゼラ・ヴィルベルツ (Gisela Wilbertz) の編による重要な論集の中で意見を表明している (Michel 2003 : 211 - 243頁)。

この論集 (Klocke - Daffa, Scheffler, Wilbertz 2003) の中でも特に以下に挙げる論文は、ケンペルが日本に与えた影響を評価するため特別に興味深い。

1. バレント・ヤン・テルヴィール (Barend Jan Terwiel) : *Der Mann mit dem hochgedrehten Schnurrbart* (上向きの口ひげの男性)

(Terwiel 2003 : 13 - 22頁)。

2. フォルカー・ライヘルト (Folker Reichert) : *Zipangu, Marco Polos Japan und das europäische Weltbild zwischen Mittelalter und Neuzeit* (ジバング, マルコ・ポーロの日本と中世と近代の間のヨーロッパの世界像) (Reichert 2003 : 147 - 168頁)。

ラインハルト・ツェルナー (Reinhard Zöllner) : *Verschlossen wider Wissen - Was Japan über sich lernte* (知っている事柄をあえてせず, 閉鎖的な行動を取る - 日本が日本自身のことについて学んだこと) (Zöllner 2003 : 185 - 209頁)。

3. ヨーセフ・クライナー (Josef Kreiner) : *Kaempfer und das europäische Japanbild* (ケンペルとヨーロッパが抱いていた日本像) (Kreiner 2003 : 245 - 263頁)。

4. ユールゲン・オースターハンメル (Jürgen Osterhammel) : *Engelbert Kaempfer und die europäische Erfassung Asiens im 18. Jahrhundert*. (エンゲルベルト・ケンペルと18世紀のアジアに対する認識) (Osterhammel 2003 : 265 - 281頁)。

ローター・ヴァイス (Lothar Weiß) : *Engelbert Kaempfer in der Nomenklatur der Zoologie* (エンゲルベルト・ケンペルの動物学に関する専門用語) (Weiß 2003 : 283 - 303頁)

現在のケンペルに関するイメージにとって解説付きのケンペルの書簡の版は重要である。なぜなら、ケンペルは作品の中でよりも書簡の中でこそ、多くのことを覆い隠さずに表現しているからである (Haberland 1990a : 95頁)。

比較的短い期間、つまり2年間だけでケンペルがどのようにして日本に関する膨大な情報を得ることができたかは多くの研究者にとって謎であった。ケンペルに関する研究において、以前は繰り返し、ケンペルはどこまで彼の作品を自分で執筆したか、または彼の作品はすべて自分が行った研究結果に基づいていたかという問題が呈された。ケンペルの研究者である今井正は

1982年に発表したケンペルが使った史料についての論文で、これまでの批判が当てはまらないことを証明している (Imai 1982a)。

ゲルハルト・ボンは1971年にすでに大英博物館でケンペルの遺構を詳細にリストアップしており、このリストは1979年に発表された (Bonn 1979 : 69 - 116頁)。これを基にして、今井はケンペルが日本からヨーロッパに持って帰った書類、およびケンペルが5冊の本のそれぞれの章で使っていた日本の文献や他のケンペルが分析した日本に関する情報をリストアップした (Imai 1982a : 63 - 81頁)。このようにケンペルの研究方法と彼が使った史料の詳細な説明によって、ケンペルのオリジナリティーに関する疑いが晴らされた。

今井は彼のケンペルの *Geschichte und Beschreibung von Japan* (日本の歴史と紀行) についての論文でケンペルの小さな間違いを指摘している (Imai 1982b : 83 - 95頁)。しかし、今井の指摘は「日本の歴史と紀行」のケンペルによるオリジナル版とドームによる版との内容と全く同一であるという前提に立っているが、実際にはドームによる版は重要な箇所でケンペルの原文から異なっている (Michel 2000 : 109 - 120頁)。

いずれにせよ、今井にとっては評判の高いケンペルの著作は、幅広く、客観的に日本の地理と文化を紹介したものであり、ヨーロッパの日本学に大きな影響を与えた重要な作品であった (Imai 1982a : 79頁)。

C.R.ボクサーはケンペルの著作をシーボルト以前の時代における日本についての最良の本であるとした (Boxer 1990 : 205頁)。

テオドル・ホイスにとってケンペルは冷静な客観性を持った非凡な書き手であった (Heuß 1956 : 20頁)。

レムゴにあるケンペルの記念碑にはラテン語でアルブレヒト・フォン・ハラールによりケンペルを讃える次のような言葉が刻まれている。

「他の海外を旅した研究者の後塵を拝することなく、常に真実を究明するためにたゆまぬ努力を尽くした」。

アルブレヒト・フォン・ハラールのみならず、チャール・デ・セコンダ・モ

ンテスキュー、ローベルト・マルトゥス、イマーヌエル・カント、アレクサンダー・フォン・フンボルト、カール・リッターなど、多くの偉大な学者たちがケンペルを「旅する研究者」であり、日本について初めて詳しく学術的に紹介した人物として讃えていた (Beck 1964:1)。

沼田次郎が指摘するように、ケンペルの著作のオランダ語訳が比較的早い時期に日本で知られるようになったため、ケンペルが日本の歴史の中で果たした役割は非常に重要であったと考えられる (Numata 1966 : 177 - 182頁)。

ケンペルと彼の『日本の歴史と紀行』という著作は18世紀から19世紀にかけて多くの日本の書物に引用されていた。特に1801年に発表された志筑忠雄による『日本の歴史と紀行』の最後の章の翻訳により、ケンペルは日本より広く知られるようになった。江戸幕府は1844年から1847年にかけて、天文方を通じてケンペルのすべての著作を日本語へ翻訳させたが、このことは幕府がこの著作を重要であると認識していたことの表れである。

1712年に発表された *Amoenitatum Exoticarum* の中でケンペルは日本の鎖国の正当性を弁護している (Kaempfer 1712)。この著作の第5巻にはケンペルによる863の日本の植物についての記述が含まれているが、これによってケンペルは日本の植物研究に大きく貢献することになった (Werger - Klein 1990 : 39 - 59頁)。

この点に関し、ヴォルフガング・ムントシックはケンペルを最初の日本植物の研究者であるとしている (Muntschick 1993 : 225頁)。

たしかにケンペルはツンベルク以前の日本植物に関する一番重要な研究者ではあったが、しかし、ケンペルより前に A・クレイアーはすでに日本の多くの植物について学術雑誌に発表し、収集物をヨーロッパへ送っていた。ムントシックは今日でもエンゲルベルト・ケンペルの名前が付いた多くの植物についてまとめている (Muntschick 1995 : 71 - 95頁)。

ブリギッテ・ホッペはハーバーラントの解説付きのケンペル著作集の第3巻でケンペルによる300点以上の日本植物のデッサンを紹介している

(Hoppe 2003)。

一方で2年間の出島での商館医としての滞在期間中のケンペルの治療成果や直接の日本への影響の大きさについては今も議論が交わされている。

しかし、今日ではほとんどすべてのケンペルを扱った日本と西洋の研究者の間で認識されているように、ケンペルが日本学の基礎を作った人物であり、彼の研究が西洋でも日本でも考古学、地理学、動物学、植物学、民族学や熱帯医学といった学問に大きな影響を与えたということは争いようのない事実である。

ペーター・カピツァの研究はケンペルに関する理解にパラダイムシフトをもたらした。カピツァはケンペルの影響が学术研究、特に宗教批判や国家政治、あるいは歴史哲学の議論の分野で残っていることを示した(Kapitza 2001)。カピツァが指摘するように、ケンペルは19世紀の終わりにすでに日本を理解するための重要な先駆者として再評価されている (Kapitza 2001 : 41頁)。

2008年 CD - Rom で出版された *Japan in Europa* (ヨーロッパにおける日本) という作品でカピツァはケンペルを通してどのようにヨーロッパ人の日本像が変わったかを示している。

一方、今井正はベルリンでの研究中に1964年に出版された「日本の歴史と紀行」のドイツ語の新版を非常に強い興味を持って読み、ケンペルの死後257年たった1973年に、この本を新しく翻訳した(Imai 1982a : 63頁)。この翻訳の第2版が1989年に出されたことはケンペルの本への関心が今でも日本で薄れていないことを示している(Kaempfer 1989)。

また特に、1971年にレムゴで設立されたエンゲルベルト・ケンペル協会と箱根にあるケンペル・ブルニー協会の盛んな交流によってこの偉大な日本学者についての記憶が呼び起こされることになった (Tunnermann 1995 : 26頁)。1947年にテオドール・ホイスはケンペルを無名であると形容していたが (Heuss 1956 : 26頁)、ここ数十年間のハーバーラントによるケンペルの

伝記 (Haberland 1990a, 1996) や解説付きのケンペルの著作の出版 (Haberland, Michel, Gössmann 2001 - 2003), そして特にベアトリス・ボダルト・ベイリーの作品 *Engelbert Kaempfers Encounter with Tokugawa Japan* (Bodart - Bailey 1995), *Kaempfers Japan - Tokugawa Culture Observed* (Bodart - Bailey 1999) と *The Dog Shogun* (Bodart - Bailey 2007) によってケンペルが日本に与えた影響, そしてヨーロッパにおける日本観に与えた影響が再評価されている。

2001年にレムゴ市は市の最も重要な市民であったケンペルの350周年を祝った。レムゴ市, リッペ周辺の連合とエンゲルベルト・ケンペル協会は協力し, 展覧会, 刊行, 発表会と学校行事を含む記念プログラムを企画した。

このプログラムにより, 海外を周った17世紀の最も重要なヨーロッパ人研究者の一人であったケンペルは讃えられた (Klocke - Daffa 2003 : 7)。

また, 350周年記念のみならず, その後も数年にわたりエンゲルベルト・ケンペルに関する多くの出版物が刊行されたが, ハーバーラントの *Engelbert Kaempfer - Ein Gelehrtenleben zwischen Tradition und Innovation* (エンゲルベルト・ケンペル - 伝統と開発における学者人生) (Haberland 2004 : 7) という作品の前書きは次のように記されている。「ケンペルの作品に関する学術的な取組は終わらず, また記憶するための行動もただ祝うための要素になったとは全く言えない。ケンペルの作品を再び扱うことによって, ケンペルの記述を発生史的な関係, また文献史的な関係で見ることが必ず必要という想定が正しいということが示されている。同時にケンペルの作品を当時の植物学, 医学と地理学の作品との関連も踏まえて分析しなければならない」 (Haberland 2004 : 7)。

ハーバーラントはケンペルの生誕350周年の際, 2001年9月にヴォルフエンビュッテル市のヘルツォーク・アウグスト・図書館でエンゲルベルト・ケンペルについての学術シンポジウムを企画したが, このシンポジウムでは様々な専門的な視点からの成果があげられている (Haberland 2004 : 8)。ハーバー

ラントの論集でウルリヒ・ゴッホは日本に対するケンペルの見方の新しい成果を扱っている (Goch 2004 : 199 - 210)。

ブリギッテ・ホッペはケンペルの日本の植物に関する学術的な研究をケンペルに先行する研究者先と比較検討している (Hoppe 2004 : 125 - 154)。

カール・アウグスト・ノイハウゼンはケンペルのラテン語のテキストを取り扱っており、これらのテキストはケンペルの研究を理解するための重要な鍵になると考えられる (Neuhausen 2004 : 23 - 76)。特にノイハウゼンは彼の興味深い分析の中で、ケンペルのラテン語の著者としての重要性を確認するためにも、ケンペルのよるラテン語のテキストとその参考資料のリストを出版することの重要性を指摘している (Neuhausen 2004 : 76)。

さらに、アムステルダム大学教授のローロフ・ファン・ゲルデルはケンペルがオランダの東インド会社で研究者として働いていた時の役割を分析している (van Gelder 2004 : 211 - 225)。ファン・ゲルデルは特にケンペルが経済的に困窮していた時に書かれた作品を称賛している (van Gelder 2004 : 225)。

その一方で、芸術史家であるニールス・ベュットネルはケンペルの作品の風景画とイラストを研究している (Büttner 2004 : 67 - 104)。

ケンペルは生前、すべての学術的な作品を発表することができなかったが、ここ数十年間でようやくケンペルの数多くの作品が再評価され、彼の作品の重要性が認められるようになった (Möhlmann 2008 : 21)。

筆者は2009年8月にレムゴを訪問した際に大妻女子大学のベアトリス・ボダルト・ベイリー教授とエンゲルベルト・ケンペル・ギムナジウムの文書保管係のローター・ヴァイス博士の案内で彼らと一緒にレムゴのケンペルの足跡を巡った。この際に筆者はビデオにて記録を行ったが、ボダルト・ベイリー教授はケンペルの生家、市の文書館、レムゴ近郊リーメにあるシュタインホーフ、聖ニコライ教会のケンペルの家族墓所、エンゲルベルト・ケンペル・ギムナジウム、魔女市長の家、ケンペルの記念碑と顕彰碑といった、ケンペル

にまつわる重要な場所において案内して下さった。

ケンペルの生家は今日では聖ニコライ教会の信者の集会堂として使われている。リーメのシュタインホーフはケンペルが1694年日本から帰ってきた後で購入した家である。

ケンペルが通っていた学校はラテン語 *Schola Legoviensis* (レムゴの学校) と呼ばれていたが、1938年に *Engelbert-Kaempfer-Gymnasium* (エンゲルベルト・ケンペル学校) と改名された。

校庭にはケンペルがヨーロッパへ持ち帰った銀杏やカラマツ (*Larix Kaempferli*) が植えられており、ケンペルの植物分野での功績を思い出させる。

ケンペルの常設展がある魔女市長の家でローター・ヴァイス博士はケンペルに興味を持つ人のため、2008年に文献コーナーを設置した。

ドイツではケンペルのことは長い間ほとんど忘れられていたようであった。しかし、今日ではケンペルの研究が、ドイツと日本との協力関係と両国間の



レムゴ近郊リーメにあるシュタインホーフ：低い新築の方がケンペルの館のあったところ



レムゴにあるケンペル顕彰碑



デトモルト宮 ケンペルはここでリッ
ベ伯フリードリヒ・アドルフの特医と
して勤務した

知識移転に大きな役割を果たしたことがドイツでも大きく評価されている。
今回のレムゴの訪問ではそのことを再確認できた。

レムゴにある日本人が寄贈の記念碑は、日本人のケンペルの功績への称賛
を示しているといえるだろう。

Johann Adam Kulmus (1689 - 1745)

日本の江戸における第八代将軍徳川吉宗 (1716 - 1745) はヨーロッパの学問を日本にもたらすことができるよう、公式に禁止されていた西洋の本の導入に対する規制を緩和したが、実際には1650年以降既に本の導入に関して例外措置があった (Michel 1999 : 164 - 166)。規制緩和により、1720年からはキリスト教と無関係であれば、それまで禁止されていた本でも導入することができるようになった (Mori 1971 : 114)。その後、1730年には輸入禁止

令は全般的に廃止された (Conte - Helm 1996 : 7)。

将軍吉宗は天文学を学び、自ら天文学のための重要な道具を発明した (Saitō 1912 : 164 - 165)。また、日本人は実用に資する本を取り入れたが、それらの本は特に天文学や医学に関するものであった。西洋から日本への知識移転の基礎を築くため、将軍吉宗は1740年に野呂元丈と青木昆陽らに蘭学を扱うことを依頼した (Sansom 1985 : 514)。

野呂が1750年に発表したオランダ植物学についての本と、青木の1758年のオランダ語辞典はこの知識移転に貢献した。

当時、中国や日本の文明よりもヨーロッパの文明を尊重した司馬江漢 (1747 - 1818) や本多利明 (1744 - 1821) のような開放的な人物は蘭学への興味を奨励した (Boxer 1965 : 267)。この点に関し、渡辺実 は江戸時代におけるオランダ語の日本語への影響を分かりやすく説明している (Watanabe 1971 : 125 - 128)。

自らの信仰のため西洋学問を教説した神道流の平田篤胤のような人物もヨーロッパの医学分野での高い成果を認識していた (Conte - Helm 1996 : 8)。しかし、専門書の翻訳は長い間難しい問題とされていたが、様々な分野でのヨーロッパの文化的な影響は次第に大きくなり、特に医学分野での影響は、日本でも認められるようになった (Saitō 1912 : 165 - 166)。西洋医学の日本の助産術への最初の影響は、オランダ語の本の日本語訳についての酒井シヅの記述を通してうかがうことができる (Sakai 1971 : 267 - 277)。

ヴァーゲンザイル (Wagenseil) が指摘するように、西洋の影響の下で書かれた初期の三冊の日本の解剖学の本の中でも、特に杉田玄白によって翻訳されたヨーハン・アダム・クルムスの解体新書は日本医学の発展に最も大きな影響を与えた (Wagenseil 1959 : 71 - 84)。

1689年に生まれたドイツ人医師のクルムスは、自身では来日したことはなかったが、彼の著作によって日本の医学の発展に大きく貢献した。

クルムスと彼の解体新書に関しては石田純郎がヨーロッパでの精力的なフィー

ルドワークを通じ、日本医師学雑誌などのジャーナルにいくつかの重要な研究成果を発表している。

医師であった杉田玄白（1733 - 1817）は1771年に、クルムスの1731年に出版されたオランダ語訳を日本語へ翻訳した。

杉田は当初オランダ語を一語も解さなかったにも関わらず、多くの挿絵から感銘を受けた（Keene 1969 : 20 - 21）。

杉田はそれらの挿絵によって説明された事柄を実際に確かめようとしたが、解剖を許された死人は当時賤民とされたエタのみであった。

しかし、杉田は役人に賄賂を渡し、親しくしていた医師の前野良沢（1723 - 1803）と共に小塚原で死罪になった51歳の罪人の解剖に参加する機会を手に入れた（Boxer 1968:47）。

彼らは解剖された死体の内臓がクルムスの描写と一致していることに驚きを新たにした。

クルムスの解体新書の描写はそれまで日本で主流であった漢方医学の医学書とは大きく異なっており、後者の誤りが明らかになった。

このようにして、杉田玄白はクルムスの医学の技術の原則を理解し（Whitney 1941 : 116）、前野と共に解体新書を翻訳することを決めた。江戸の幕府と京都所司代からの許可を得た後、1774年に解体新書は日本で初めてのオランダ語からの翻訳書として出版された。

Ma Eikoh は杉田玄白が1815年に82歳で記した回顧録の中で自身のクルムスの著作の翻訳が、日本の文化史上重要な意義を持っていたと言及していることを指摘し、杉田玄白によるクルムスの翻訳は近代の日本文化史の転換期となり、西洋の植民地化から保護した日本の反応は西洋への挑戦でもあったと述べている（Ma Eikoh 1959 : 315）。同時に、谷口まゆみと J.Z.Bowers は、1774年に完成したこの解体新書の翻訳は、簡潔に書かれた医学の入門書ではあるが、この本が西洋医学の導入に関する転機となったとしている（Taniguchi und Bowers 1965 : 448）。

解体新書の翻訳は、日本での西洋作品の翻訳への興味のブームを引き起こさせた。

前野良沢の弟子である大槻玄沢 (1757 - 1827) が1783年に書いた蘭学についての本はオランダ語を学ぶためのものであっただけでなく、ヨーロッパの医学の他、地図製作、植物学と近代の武器技術に関する知識に関しても強調されていた。

当時の儒教学者である柴野栗山 (1734 - 1807) は無能で中国の本も読めない西洋の「野蛮人」の中にも学術的な研究能力を持つ人物もいると認識するようになり、蘭学を認めなかった他の日本人学者よりもヨーロッパ医学とより深い関わりを持った。また、池田哲郎は儒学と蘭学についての研究論文で、何人かの儒学者たちも西洋学に対する開放が必要だと認識していたことを指摘している (Ikeda 1971 : 181 - 192)。

一方、当時医学者となった多くの者たちは、政治的な障害なしで西洋の学問を学べるという理由だけで、その道を選んでいた。

テッサ・モリス・鈴木 (Tessa Morris-Suzuki) は彼女の17世紀から21世紀までの日本の技術転換についての著書の中でどのようにして西洋の知識が日本に広がったかを説明しているが、彼女によれば蘭学の教育を受けた学者、特に医者には後に大阪や江戸のような大都市に移動して、学者として西洋の知識をさらに広げた。例えば、蘭学を学んだ平賀源内は電気の導入、大島高任は高炉技術に非常に貢献した (Morris-Suzuki 1994 : 24)。

実際に出島で働いていた何人かのオランダ商館医よりも、来日していないヨーハン・アダム・クルムスは解体新書を通して西洋医学の敷衍に多く貢献した。

解体新書の翻訳は医学の分野だけではなく、日本の発展、特に西洋学へ目を向けることを促した。解体新書の翻訳に対する高い評価は、それまでの「蛮学」という表現が「蘭学」に変わったことにも表れている。

結び

近年の日本とドイツにおける研究は新しい文献に基づき、17世紀と18世紀のドイツ医学はシャムベルゲル、ケンベルとクルムスのような医師達を通じ日本医学の発展に幅広く影響与えたということを明らかにしてきた。

17世紀から18世紀にかけてドイツ医学に関する新しい知識を導入して以降、日本は次第に漢方医学から離れて行ったが、それは明治時代におけるドイツ医学制度を日本に導入するための基礎となった。また、シャムベルゲル、ケンベルとクルムスのようなドイツ人の医師達の影響は医学だけではなく、諸々の学問に及んでおり、当時の日本医学史がその後の日本の近代化に貢献したということができるであろう。

参考文献

- Beck, Hanno (1964): Einführung zum Neudruck. In: Kaempfer, Engelbert: *Geschichte und Beschreibung von Japan aus den Originalhandschriften des Verfassers* (ed. by Christian Wilhelm Dohm). Vol.1 Stuttgart: Brockhaus, pp.119 - 126.
- Bodart-Bailey, Beatrice M. (1988): Kaempfer Restor'd, In: *Monumenta Nipponica. Studies in Japanese Culture* 43, 1, pp.1 - 33.
- Bodart-Bailey, Beatrice M. and Derek Massarella (eds.) (1995): *The Furthest Goal. Engelbert Kaempfer's Encounter with Tokugawa Japan*. Folkestone: Japan Library.
- Bodart-Bailey, Beatrice M. (1999): *Kaempfer's Japan. Tokugawa Culture Observed*. University of Hawaii Press.
- Bodart-Bailey, Beatrice M. (2007): *The Dog Shogun. The Personality and Policies of Tokugawa Tsunayoshi*. University of Hawaii Press.
- Bodart-Bailey, Beatrice M. (2009): Kenperu -Reisetsu no kuni ni kitarite.
- Bonn, Gerhard (1979): Der wissenschaftliche Nachlass des lippischen Forschungsreisenden Engelbert Kaempfer im Britischen Museum. In: *Lippische Mitteilungen*, Vol.48, pp.69 - 116.
- Boxer, C.R. (1965): *The Dutch Seaborne Empire, 1600 - 1800*. London: Penguin Books.

- Boxer, C.R. (1968): *Jan Compagnie in Japan 1600 - 1817. An Essay on the Cultural, Artistic and Scientific Influence exercised by the Hollanders in Japan from the Seventeenth to the Nineteenth Centuries*. Tokyo: Oxford University Press.
- Boxer, C.R. (1976): *The Christian Century in Japan 1549 - 1650*. Tokyo: Kaibunsha.
- Brown, Yu-Ying (1990): Dai-Ei toshokan shozō Kenperu shōrai Nihon shiryō no igi. In: Deutsches Institut für Japanstudien (ed.): *Doitsu-jin no mita Genroku jidai, Kenperu-ten*. Tokyo: Deutsches Institut für Japanstudien, pp.102 - 108.
- Büttner, Nils (2004): Reisebilder, Kunsthistorische Anmerkungen zu Engelbert Kaempfers Landschaftszeichnungen und zu den Illustrationen seiner gedruckten Werke, in Haberland (2004), pp.77 - 104.
- Conte-Helm, Marie (1996): *The Japanese and Europe, Economic and Cultural Encounters*, London/Atlantic Highlands: Athlone.
- Franz, Edgar (2005): Deutsche Mediziner in Japan. Ein Beitrag zum Wissenstransfer in der Edo-Zeit. In: *Japanstudien, vol.17*. Munich: Iudicium, pp.31 - 56.
- Gelder, Roelof van (2004): Nec semper feriet quodcumque minabitur arcus - Engelbert Kaempfer as a scientist in the service of the Dutch East India Company. In: Haberland (2004), pp.211-210.
- Goch, Ulrich (2004): Das Neue an der Japansicht Engelbert Kaempfers. In: Haberland (2004), pp.199 - 210.
- Goodman, Grant K. (1986): *Japan. The Dutch Experience*. London: The Athlone Press.
- Haberland, Detlef (1990a): *Das ungewöhnliche Leben des Engelbert Kaempfer 1651 - 1716*. Bielefeld: Westfalen Verlag.
- Haberland, Detlef (1990b): Engelbert Kaempfer - Arzt, Reisender und „Entdecker“ Japans. In: Japanisches Kulturinstitut Köln (ed.): *Kulturvermittler zwischen Japan und Deutschland. Frankfurt am Main/New York: Campus Verlag*, pp.9 - 30.
- Haberland, Detlef (1996): *Engelbert Kaempfer (1651 - 1716)*. A Biography. London: British Library.
- Haberland, Detlef, Wolfgang Michel und Elisabeth Gössmann (eds.) (2001 - 2003): *Engelbert Kaempfer. Werke*. Kritische Ausgabe in 6 Einzelbänden. Munich: Iudicium.
- Haberland, Detlef (2001): Briefe 1683 - 1715. In: Haberland, Detlef et al. (ed.)

- Engelbert Kaempfer. Werke.* Kritische Ausgabe in Einzelbänden, vol. 2, Munich: Iudicium.
- Haberland, Detlef (2004) (ed.): *Engelbert Kaempfer (1651 - 1716). Ein Gelehrtenleben zwischen Tradition und Innovation*, Wiesbaden, Harrassowitz.
- Heuß, Theodor (1956): *Schattenbeschwörung. Randfiguren der Geschichte.* Frankfurt am Main: Fischer.
- Hoppe, Brigitte (ed.) (2003): *Engelbert Kaempfer. Werke. Vol.3: Zeichnungen japanischer Pflanzen.* Munich: Iudicium.
- Hoppe, Brigitte (2004): Kaempfers Forschungen über japanische Pflanzen im Vergleich zu denen seiner Vorgänger. In: Haberland (2004), pp.125 - 153.
- Ikeda, Tetsuro (1971): Jugaku to rangaku. In: *Ogata Tomio (Hg.): Rangaku to Nihon bunka.* Tokyo: Tokyo University, pp.181-192.
- Imai, Tadashi (1982a): Engelbert Kaempfer und seine Quellen, Literatur und sonstige Informationen, die Kaempfer für sein Japan-Buch zur Ergänzung seiner Beobachtungen benutzte. In: Hüls, Hans und Hans Hoppe (Hg.): *Engelbert Kaempfer zum 330. Geburtstag. Lemgo: Wagner*, pp.83-132.
- Kaempfer, Engelbert (1964): *Geschichte und Beschreibung von Japan, aus den Originalhandschriften des Verfassers.* 2 Volumes, Berlin.
- Kaempfer, Engelbert (1989): *Nihon-shi, Nihon no rekishi to kikō.* 2nd edition, Tokyo: Kasumigaseki Shuppan.
- Kapitza, Peter (2001): *Engelbert Kaempfer und die europäische Aufklärung- Dem Andenken des Lemgoer Reisenden aus Anlass seines 350. Geburtstages am 16. September 2001.* Munich: Iudicium.
- Kapitza, Peter (2008): *Japan in Europa*, Munich: Iudicium.
- Katagiri, Kazuo (1995): *Oranda tsūji Imamura Gen'emon Eisei.* Maruzen Library No.145. Tokio: Maruzen.
- Katagiri, Kazuo (1997): Gen'emon Eisei Imamura und Engelbert Kaempfer. In: *Lippische Mitteilungen aus Geshichte und Landeskunde* 66, pp. 57-74.
- Keene, Donald (1969): *The Japanese Discovery of Europe 1720 - 1830.* Stanford: Stanford University Press.
- Kleiweg de Zwaan, J.P. (1917): *Völkerkundliches und Geschichtliches über die Heilkunde der Chinesen und Japaner. Mit besonderer Berücksichtigung holländischer Einflüsse.* Haarlem: Erven Loosjes.
- Klocke-Daffa, Sabine, Jürgen Scheffler and Gisela Wilbertz (eds.) (2003):

- Engelbert Kaempfer (1651 - 1716) und die kulturelle Begegnung zwischen Europa und Asien.* Lippische Studien, Vol.18. Lemgo: Landesverband Lippe - Institut für Lippische Landeskunde.
- Kreiner, Josef (2003): Kaempfer und das europäische Japanbild. In: Klocke-Daffa 2003, pp.245-263.
- Ma, Eikoh (1959): Japan's Encounter with Western Medical Science. In: *Bulletin of the History of Medicine* 33, pp.315 - 329.
- Meier-Lemgo, Karl (1937): *Engelbert Kaempfer, der erste deutsche Forschungsreisende, 1651-1716. Leben, Reisen, Forschungen nach den beiden unveröffentlichten Handschriften Kaempfers im Britischen Museum.* Stuttgart: Strecker und Schröder.
- Meier-Lemgo, Karl (1960): *Engelbert Kaempfer (1651 - 1716) erforscht das seltsame Asien.* 2. Berichtigte und erweiterte Auflage. Hamburg: Cram de Gruyter.
- Meissner, Kurt (1961): *Deutsche in Japan 1639 - 1960.* Tokyo: Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens.
- Mestler, Gordon E. (1957): Introduction to Western Influences in Pre-Meiji Japanese Medicine. In: *Proceedings of the Royal Society of Medicine* 50, pp.1005 - 1013.
- Michel, Wolfgang (1990): Dejima rankan-i Kasuparu Shamuberugeru no shōgai ni tsuite. In: *Nihon Ishigaku Zasshi* 36, 3, pp.201 - 210.
- Michel, Wolfgang (1995): Nihon ni okeru Kasuparu Shamuberugeru no katsudō ni tsuite. In: *Nihon Ishigaku Zasshi* 41, 1, pp.3-28.
- Michel, Wolfgang (1996): Kasuparu Shamuberugeru to kasuparu ryūgeka (1). In: *Nihon Ishigaku Zasshi* 42, 3, pp.323 - 348.
- Michel, Wolfgang (1996): Kasuparu Shamuberugeru to kasuparu ryūgeka (2). In *Nihon Ishigaku Zasshi* 42, 4. pp.521 - 546.
- Michel, Wolfgang (1999): *Von Leipzig nach Japan. Der Chirurg und Handelsmann Caspar Schamberger (1623 - 1706).* Munich: Iudicium.
- Michel, Wolfgang (2000): History of Japan-Engelbert Kaempfer's Manuscript in a new translation. In: *Monumenta Nipponica* 55, 1, pp.109 - 120.
- Michel, Wolfgang and Barend J. Terwiel (2001): *Engelbert Kaempfer. Werke. Bände 1/1 und 1/2. Heutiges Japan.* Munich: Iudicium.
- Michel, Wolfgang (2003): Kaempfers Japan and Dohms Kaempfer. In: Klocke-Daffa, Sabine, Jürgen Scheffler and Gisela Wilbertz (eds.): *Engelbert Kaempfer (1651 - 1716) und die kulturelle Begegnung zwischen Europa und Asien,* Lemgo: Landesverband Lippe-Institut für

- Lippische Landeskunde, pp.211 - 243.
- Michel, Wolfgang (2008) Medicine and Allied Science in the Cultural Exchange between Japan and Europe in the 17th Century. In: Ölschleger 2008, pp.285 - 301.
- Miyazaki, Katsunori (2009): Kenperu ya Shiiboruto-tachi ga mita kyūshū, soshite Nippon.
- Mori, Mutsuhiko (1971): Tokugawa bakufu no yōgakusho no honyaku shuppan kisei. In: Ogata, Tomio (ed.): *Rangaku to Nihon bunka*. Tokyo: Tokyo University, pp.113 - 120.
- Morris-Suzuki, Tessa (1994): *The Technological Transformation of Japan. From the Seventeenth to the Twenty-first Century*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mutschick, Wolfgang (1993): Engelbert Kaempfer als Erforscher der japanischen Pflanzenwelt. In Detlef Haberland (ed.): *Engelbert Kaempfer. Werk und Wirkung*, Stuttgart: F. Steiner, pp.222-245.
- Muntschick, Wolfgang (1995): The Plants that Carry his Name: Engelbert Kaempfer's Study of the Japanese Flora. In Bodart-Bailey, Beatrice M. and Derek Massarella (eds.): *The Furthest Goal, Engelbert Kaempfer's Encounter with Tokugawa Japan. Folkstone: Japan Library*, pp.71-95.
- Numata, Jirō (1966): Nihon ni okeru Kenperu to sono eikyō. In: *Kinnen ronbunken Engeruberuto Kenperu (1651-1716), Firippu Furantsu Fon Shiiboruto (1796-1866)*. Tokyo: Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, pp.169 - 187.
- Neuhausen, Karl August (2004): Engelbert Kaempfer als lateinischer Prosaautor. In: Haberland (2004), pp.23 - 76.
- Ölschleger, Hans Dieter (2008): The Cultural Turn in German Japanese Studies. In: Ölschleger (2008), pp.91 - 99.
- Ölschleger (ed.) (2008): *Theories and Methods in Japanese Studies: Current State and Future Developments*, Bonn, University Press.
- Osterhammel, Jürgen (2003): Engelbert Kaempfer und die europäische Erfassung Asiens im 18. Jahrhundert, in: Klocke-Daffa (2003), pp.265 - 281.
- Otori, Ranzaburo (1971): 17 seiki ni okeru nichiran igaku no kōshō. In: Ogata, Tomio (ed.): *Rangaku to Nihon bunka*. Tokyo: Tokyo University, pp.235-236.
- Reichert, Folker (2003): Zipango, Marco Polos Japan und das europäische Weltbild zwischen Mittelalter und Neuzeit, in: Klocke-Daffa 2003, pp.

147 - 168.

- Saitō, Hisho (1912): *Geschichte Japans*. Berlin: Dümmlers Verlagsbuchhandlung.
- Sakai Shizu (1971): Nihon no kindai sankā no reimeiki ni mirareru seiyō igaku no eikyō, ransho no honyaku o chūshin ni shite. In: Ogata, Tomio (ed.): *Rangaku to Nihon bunka*. Tokyo: Tokyo University, pp. 267 - 277.
- Sugimoto Masayoshi and David L. Swain (1978): *Science and Culture in Traditional Japan. A. D. 600-1854*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Taniguchi M. and J. Z. Bowers (1965): Pompe van Meerdervord and the first western Medical School in Japan. In: *Journal of medical Education* 40, pp.448 - 454.
- Terwiel, Barend Jan Terwiel (2003): Der Mann mit dem hochgedrehten Schnurrbart. In: Klocke-Daffa 2003, pp.13 - 22.
- Tünnermann, Sigrid (1995): Die Engelbert-Kaempfer Gesellschaft Lemgo e.V. In: *Japan Magazin* 4, p.26.
- Velde, Paul van der (1993): Die Achse, um die sich alles dreht. Imamura Gen'emon Eisei (1671-1736) Dolmetscher und ebenbürtiger „Diener“ Kaempfers. In: Haberland, Detlef (ed.): *Engelbert Kaempfer. Werk und Wirkung*. Stuttgart: F. Steiner, pp.174 - 193.
- Wagenseil, F. (1959): Die drei ersten unter europäischem (holländischem) Einfluß entstandenen japanischen Anatomiebücher. In: *Sudhoffs Archiv für die Geschichte der Medizin* 43, pp.61-85.
- Werger-Klein, K. Elke (1990): Engelbert Kaempfer. Botanist at the VOC. In: Haberland, Detlef (ed.): *Engelbert Kaempfer. Werk und Wirkung*. Stuttgart: F.Steiner, pp.39 - 59.
- Weiß, Lothar (2003): Engelbert Kaempfers Namen in der Nomenklatur der Zoologie. In Klocke-Daffa, pp.283 - 303.